

エネルギー需給と諸子百家

(一財) 日本エネルギー経済研究所
計量分析ユニット 需給分析・予測グループ
鈴木 研悟

将来のエネルギー需給構造を推計するための数理モデルは、バックキャスト型とフォアキャスト型の 2 種類に大別することができる。バックキャスト型のモデルとは、未来のある時点において達成すべき目標をあらかじめ決めた上で、現状とその目標とのギャップを埋めるために必要な、現在からその時点までの一連の変化を明らかにするモデルであり、一方のフォアキャスト型のモデルとは、分析対象の現状を明らかにした上で、その現状を出発点とする時間発展によって将来の姿を推計するモデルである。

将来のエネルギー需給構造をゼロベースで見直すことが叫ばれている今、バックキャスト型の考え方が支配的になってきているように見受けられる。すなわち、エネルギー需給構造を含めた社会のあるべき姿について議論をした上で、その理想を実現するために今何をすべきかを決めよう、という考え方である。足元を出発点として議論を進めるフォアキャストの考え方では大きな改革を進められない、との批判を耳にすることもある。

これら 2 種類のモデルについて学び、それらにまつわる議論を耳にする中で、学生時代に濫読した古代中国思想の書物のことをふと思い出し、読み返している。諸子百家と総称される古代中国の様々な思想も、実はバックキャスト型とフォアキャスト型、すなわち、ある理念・理想を置いた上でそれに行き着くために何が必要であるかを説く思想と、現状の観察や分析に基づいてどのように振舞えばよいかを考える思想とに大別されるのではないか。そんなことに思い当たったからである。

バックキャスト的な思想の代表としては、儒教が挙げられる。儒教において理想とされる人間像（聖人と呼ばれる）とは、自分に過ちがないかを常に省みて（「吾れ日に三たび吾が身を省みる」）、周囲の人々から親愛の情を持たれるよう努める（「老者はこれを安んじ、朋友はこれを信じ、少者はこれを懐けん」）人格者である。そのような善なる人物が政治を行うことによって、民衆も感化されて善くなってゆき、その秩序の元で社会も豊かになる、というのが儒教の主張するところである。この、理想的な人間像と社会像をあらかじめ定義し、その実現に何が必要かと問いを立てるやり方は、バックキャスト的と言ってよいのではないか。

後者の代表としては、観察と実体験を重視する道教が挙げられる。例えば老子には「上善は水の若し。水は善く万物を利して争わず、衆人の悪むところに処る、故に道に幾し」とあり、水の動きや働きを模した生き方が勧められている。そこには、あるがままの自然を観察した上で、そこから何か知恵を引き出そうという態度が見て取れる。また、道教の神話には、老子が人間の王に火の扱い方や農作物の育て方等の知恵を授けるくだりがある

が、例えば、人間の王がうっかり山火事を起こすのを黙って見ていたり、彼に焼けた獣の肉を食べさせて美味なることを確かめさせたりと、実体験を通じた知識の習得をうながす形で話が進んでいる。こうした、観察や経験の積み重ねによって心身双方の豊さを指向する態度は、フォアキャスト的と言えるのではなかろうか。

これら 2 つの思想のうちでどちらかが絶対的に優れているということはなく、両者を比較するにも種々の視点がありうるだろう。その点を踏まえた上で私が思うのは、儒教のようなバックキャスト型の思想が安定した時代の治世に向くのに対し、道教のようなフォアキャスト型の思想は乱世を生き抜くに向くのではないか、ということである

儒教は、孔子の生きた群雄割拠の時代（春秋時代）にはあまり栄えなかったものの、戦国時代、秦王朝を経て成立した漢王朝の時代に大いに栄えた。これは、長期にわたる統一国家の統治下で、人としてより優れた生き方について論じ、それを目指すためのゆとりが生まれたことと関係があろう。一般に「衣食足りて礼節を知る」と言われる通り、人は、生きるために必要な物資の不足がなくなり、心身ともに余裕ができて初めて、理想を目指すことができるのであろう。

では、その漢王朝と儒教が力を失い、再び戦乱の時代（三国時代）へと向かう過程で何が起こったか。この時代随一の英雄と言えば、次の統一王朝である晋王朝の礎を築いた魏の武帝（曹操）であるが、彼が精読の上注釈を入れた孫子の兵法には、道教の影響を感じさせる箇所が少なくない。例えば、あるべき軍の動かし方を水の性質に喩えるくだりは善に関する老子の議論を彷彿させるし、自国と敵国の優劣をどのような基準で比べるべきかを説く様子は、木火土金水の五行の優劣や（水から木が生じ、木から火が生じる等）、火の長所と短所を比較する老子の態度に通じるものがある。戦乱の時代を生き抜くには崇高な理念よりも眼前の現実を見据える必要があることから、武帝は理想主義的な儒教を軽んじ、道教が重視した観察眼を政略に応用した孫子を重んじたのであろう。

さて、今日のエネルギー需給を巡る状況は、泰平の世であるか、それとも乱世と言うべきであろうか。十分な量のエネルギー源が安定的に確保されており、今後もそれが続く見通しであれば、何かしら理想的なエネルギー需給構造を定義して、それに向けた取捨選択を議論するのも悪くはないだろう。しかし、当面のエネルギー供給に不安があり、その不安解消が第一の課題とされる状況においては、まずは現状を冷徹に観察し、その結果を出発点とした現実的な議論を進めることが先決ではないか。理想を現実に優先させてよい状況は限られており、時と場所を誤れば「宋襄の仁」となる。遙か彼方の理想を掲げるのは、乱世の終焉を待ってからでも遅くはあるまい。